

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

『源氏物語』と斎王

著者	原 槿子
出版者	法政大学国文学会
雑誌名	日本文学誌要
巻	75
ページ	40-52
発行年	2007-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/9392

『源氏物語』と斎王

原 槇 子

「斎王」とは「いつきのみこ」と訓読みし、伊勢神宮及び賀茂神社に奉仕した未婚の内親王、又は皇女をいう。伊勢の斎王を「斎宮」といい、賀茂の斎王を「斎院」という。

『源氏物語』には、斎王として、六条御息所の娘である秋好中宮の他に、朝顔の姫君、そして桐壺院の皇女である女三の宮の三人が登場する。この中で、秋好中宮だけが斎宮であり、朝顔の姫君、女三の宮はともに斎院である。この斎宮や斎院たちは『源氏物語』の中で、どのような物語を紡ぎ、またどのような位置づけられているのか、『源氏物語』の中に描かれる斎王の役割について私見を述べる。

一 『源氏物語』における二人の斎院

まず斎院として登場する女三の宮について述べていく。この女三の宮は桐壺帝の皇女で、母は弘徽殿太后である。光源氏と

は異母兄妹の間柄である。この女三の宮の初出は「桐壺」の巻である。光皇子が七つになり、聡明で賢く、見るとついほえまずにはいられない美しさなので、弘徽殿も、この若宮を遠ざけることができない、ということが記された後に、

女御子たち二ところ、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。

【桐壺^(注1)】

と、「女御子たち二ところ」と、名前も記されずに、ただ光皇子を引き立てる存在としての登場である。そして、「花宴」で「女御子たちなども生い出づる所なれば」、「寝殿に女一の宮、女三の宮のおはします」と、女三の宮は初めて「女三の宮」という呼称を持って登場するが、そこでもその存在が語られるだけである。桐壺帝から朱雀帝への譲位にともなうて、斎宮には、故前坊と六条御息所の間に生まれた姫宮が卜定され、斎院にはこの女三の宮が卜定される。そこで初めて、

帝、后いとことに思ひきこえたまへる宮なれば、筋異にな

りたまふをいと苦しい思したれど、他宮たちのさるべきおはせず、儀式など、常の神事なれど、いかめしうのしる。祭のほど、限りある公事に添ふこと多く、見どころこよなし。人からと見えたり。

【葵】

と、女三の宮が帝や後の鍾愛する姫であり、本当は斎院にしたくはなかったが、他に適当な内親王がいなかったために、仕方なく「女三の宮」に定まったという経緯が述べられる。そしてそれだけに今回はこの斎院が奉仕する最初の賀茂祭の行事なので、見栄えのするように決まり以上のことをして盛り立てようと、この祭が特別であることが語られる。

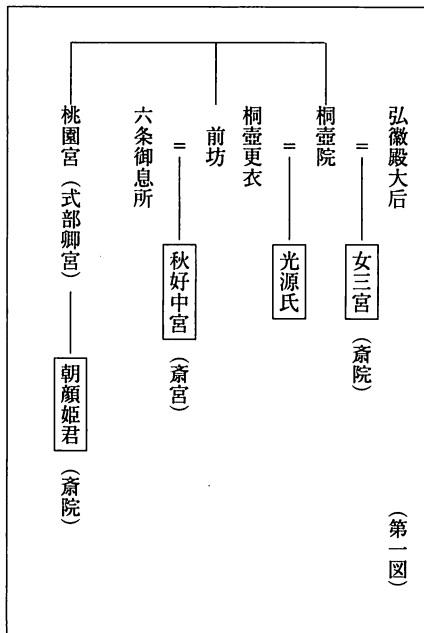
賀茂祭の御禊には、光源氏もその行列の供奉をしているが、その当日、華やかな賀茂の祭りを見ようと、京ばかりか、地方の人々までが集まりにぎわう。その喧噪の中で、美しい行列を背景に、新斎宮の母である六条御息所は、斎宮とともに伊勢下向をすることを口実に、源氏への未練を断ち切ろうかと悩む。そうした六条御息所と、光源氏の子を宿して、初めて満ち足りた思いの、正妻葵上との間に車争いが起こる。

この賀茂の御禊の日、「斎宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。」と「慰め」を欲する六条御息所の「もの思し乱るる」心の内は、源氏への未練だけとは言えない。斎院は、前の帝、桐壺帝の皇女であり、斎院の母は弘徽殿太后で、右大臣の後ろ盾もある。一方新斎宮は、父の前坊はすでに亡く、桐壺院が「斎宮をもこの皇女たちの列になむ思へば」と言うものの、何の後ろ盾もない心細さである。こうした幾層もの悩みと心細さを負った六条御息所が

味わう屈辱が、車争いの事件であると言えよう。

この女三の宮の『源氏物語』での役割を考えた時、女三の宮が物語に連関しているものは二つある。一つは斎院の交替ということを通して、御代の交替、すなわち桐壺帝から朱雀帝への交替であり、言い換えれば、源氏を守る勢力から敵対勢力への移行を暗示することである。そして二つ目は、賀茂祭りの車争いの出来事を通して、六条御息所の孤愁の思いを増大させ、「野宮」での源氏との別れを導き、そして御息所の物語を紡ぎ出していくことである。

やがてこの女三の宮は、父桐壺院の崩御によって、斎院を退出し、朱雀院で暮らす。その後は物語の中に登場しなくなる。そしてこの女三の宮の後任として、朝顔の姫君が斎院に卜定されるのである。



朝顔の斎院は、第一図で示した通り、桃園の宮の姫君で源氏にとっては従兄妹にあたる。この朝顔の姫君は、「式部卿宮の姫君に朝顔奉りたまひし」と、「帚木」の巻に突然登場する。

その名の由来は、源氏から朝顔を贈られたことによったもので、以後「朝顔の姫君」とよばれる。朝顔の姫君のものには、かねてより光源氏から歌などが贈られるが、朝顔の姫君は、六条御息所が前坊の後という高貴な身分でありながら、源氏との恋で嘆き、苦悩していることを聞くにつけても、決して自分はその境遇にはなるまいと心に決めていた。そしてその姿勢は最後までくずれない。

斎院在任中も、また父宮の死によって、斎院を退き、桃園の宮で女五の宮と共に住むようになってからも、源氏との文通は絶えないが、一貫して、源氏との深い関係を拒み続けている。その為に、源氏はますます朝顔の斎院を求め続けていくことになる。

光源氏にとって、一度として思いをとげるこのできなかった唯一の女性が、この朝顔の斎院である。しかし、この朝顔の斎院を『源氏物語』の全体を通して眺めた時、斎院その人は、物語上に折々にしか顔を出さず、表だったストーリーの構成者であるとはいえない。しかし、朝顔の斎院の、物語への影響を考えた時、その存在が物語に与える影響は非常に大きいものであることにも気づく。たとえば、『源氏物語』の女主人公たる紫上に、

同じ筋にはものしたまへど、おぼえことに、昔よりやむごとなく聞こえたまふを、御心など移りなばはしたなくもあべ

いかな。年ごろの御もてなしなどは立ち並ぶ方なくさすがにならひて、人に押し消したれむことなど、人知れず思し嘆かる。かき絶えなごりなきさまにもてなししたまはずとも、いとものはかなきさまにて見馴れたまへる年ごろの睦び、あなづらはしき方にこそはあらめ、などさまさまに思ひ乱れたまふに、よろしきことこそ、うち怨じなど憎からずきこえたまへ、まめやかにつらしと思せば、色にも出だしたまはず。

【朝顔】

という深刻な悩みを与えた張本人である。また源氏が須磨、明石に流竄した要因の一つにもなっているのである。すなわち、源氏が、須磨、明石に行くことになる直接の原因は、朧月夜との密通事件であるが、朧月夜と源氏との関係を知って怒る右大臣と弘徽殿太后との会話には、

男の例とはいひながら、大将もいとけしからぬ御心なりけり。斎院をもなほ聞こえ犯しつづ、忍びに御文通はしなどしと、けしきあることなど、人の語りはべりしをも、

【賢木】

と、朝顔の斎院のことまでが引き合いに出され、「斎院の御事はましてさもあらん。」と語られる。さらには後に朱雀院の皇女、女三の宮の源氏への降嫁が問題になるや、三の宮の乳母になかなか、なほいかなるにつけても、(源氏の君は)人をゆかしく思したる心は絶えずものせさせたまふなれ。その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前斎院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ。

【若菜上】

と噂される相手ともなる。女三の宮の乳母たちにまで、光源氏

の高貴な姫君への志向が見抜かれ、朝顔の前斎院への、源氏の未練が語られるのである。

朝顔の斎院は、物語の表面にこそ華々しく登場はしない。しかし前掲の通り、朱雀院が女三の宮の婿捜しに悩んでいる時に乳母たちが、わざわざ朱雀院に申し上げねばならないほど、物語の中で重く位置づけられているのである。

光源氏には、共に住んでいる紫上がいる。紫上は式部卿の娘であり、桃園式部卿の娘である朝顔の斎院とは、女王という点でも同じ身分であって、朝顔の斎院に比べて身分的には遜色はない。しかし、紫上は北の方の娘ではなく、育ち方も光源氏が大切に育てた姫ではあるが、父親の親王家で、深窓に育てられた姫とは言えない。一方、朝顔の斎院は正妻の姫であって、斎院にまで卜定された方である。斎院になるということは、女王であっても、内親王と同列にみなされることで、その身の尊さはやんごとなく、紫上が我が身を不安に思い、嘆いたことも、もったもなことではある。朝顔の姫君は源氏の正妻たり得る人物であった。

しかし、この朝顔の斎院は、最後まで源氏を拒み通し、後に出家している。源氏に、「あはれをも知り、ゆゑをも過ぐさず、よそながらの睦びかはしつべき人【若菜下】」といわれ、「かの人の御なずらひにだにもあらざりける【若菜下】」と、思慮深くそれでいて懐かしみのある点では、あの斎院にくらべられる人はいなかった、とまで評される人である。

このような朝顔の斎院にくらべ、源氏の正妻になった朱雀院の皇女、女三の宮が、後に柏木と密通事件を起こしたことを考

え合わせると、事情はともかく、朝顔の斎院と女三の宮という二人が、全く相反する形で読者の前に浮かび上がってくる。幼く自分の意志も持てないまま、柏木と密通事件を起こす女三の宮。それに反して、当代の権力者であり、昔から一貫して求愛し続ける光源氏を、意志力で拒み通す朝顔の斎院。

朝顔の斎院は『源氏物語』の中で、華々しいヒロインとしての位置づけこそされてはいないが、正妻たる資格を持ちながらそうならないことによって、その自らの存在感を示している。そしてもう一方は、正妻となりながらあまりにも幼い存在。ともに、紫上の心情、苦悩を描き出すための、物語内での役割を果たしながらも、その人物像の形象は対比的であり、この物語を一層奥の深いものに行っているといえよう。

二 『源氏物語』における斎宮

もう一人の斎王で、『源氏物語』の中でたつた一人の斎宮であり、斎宮退下後に冷泉院の中宮になった前坊の姫君について考えてみたい。この前坊の姫君の母は六条御息所である。父宮が亡くなつてからは、桐壺帝が、御子と同列に意を用いた姫君であり、朱雀帝の即位にあたって斎宮に卜定された。

この父親の前坊が亡くなる何年か前に桐壺帝の第一皇子、朱雀帝が立坊している。朱雀帝の立坊が七歳の時であり、即位が二四歳、この時の斎宮の年齢が十三歳ということと考え、父親の前坊が、皇太子の位を朱雀帝に譲って、なお四年は生きていたといえる。何か廃太子になるべき事件があったのである

うか。そう考えて、斎宮の歴史を見た時に、酒人内親王や朝原内親王、恬子内親王のように廃太子の縁者であった人が斎宮に卜定されていることが想起される。つまり、ここでも、廃太子の娘の斎宮卜定ということが設定されている。^(注)しかしここでは、病気による皇太子の交替であったとしても姫君の「斎宮」という立場は変わらない。

さて、以下に引用するのは前坊の姫君が伊勢に参向するまでの動向である。

① 斎宮は、去年内裏に入りたまふべかりしを、さまざまさはることありて、この秋入りたまふ。
(初斎院)【葵】

② かの御息所は、斎宮は左衛門の府に入りたまひにければ、いとどいつくしき御浄まはりにことつけて聞こえも通ひたまはず。
(初斎院)【葵】

③ 斎宮の御下り近うなりゆくまに、御息所もの心細く思はず。
(群行)【賢木】

④ ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりあたりいとかりそめなめり。黒木の鳥居どもは、さすがに神々しう見たされて、わづらはしきけしきなるに、神官の者ども、ここかしこにうちしはおきて、おのがどちものうち言ひたるけはひなども、ほかにさま変はりて見ゆ。

(野宮)【賢木】
⑤ 十六日、桂川にて、御祓したまふ。常の儀式にまさりて、長奉送使など、さらぬ上達部も、やむごとくおほえあるを選らせたまへり。
(御祓)【賢木】

⑥ 斎宮は十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはする

さまを、うるはしうしたてたてまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにてしはたれさせたまひぬ。

(別れの御櫛)【賢木】

これは、前坊の姫君(後の秋好中宮)の斎宮としての儀式の一端である。斎宮に卜定されてから伊勢に至るまでには、歴史的事実として、さまざまの行事が定められている。その実際に定められた事柄と『源氏物語』のなかに描かれた場面を比較してみると、『源氏物語』には、史実が驚くほど正確に、詳しく凝縮されて取り入れられている。しかし、このように斎宮について詳細に書かれていながら、『葵』、『賢木』の巻をじっくり読み通してみると、表面は斎宮の卜定から、順次述べていながら、その本筋は、斎宮のことを述べているのではなく、斎宮の母たる六条御息所の心の悩み、苦しみ、哀れさが強調される結果になっている。

前坊の姫君が、一人の人間としての人格を明らかにして登場するのは、朱雀帝の譲位によって斎宮を退下して、帰京し、やがて母六条御息所も亡くなり、光源氏の養女として冷泉帝に入内する頃からである。入内が決まり、かねて「別れの御櫛」以来この前斎宮に心ひかれていた朱雀院を落胆させ、また、光源氏に対しても養女という立場ではありながら、終始魅惑的な存在であり続ける。この頃から一人の女性として活き活きと動き始める。

前斎宮、斎宮女御、梅壺の御方と呼ばれ、やがて立后して秋好中宮となり、冷泉帝の寵愛を受けて、個性をもった一人の登

場人物として『源氏物語』の一構成員となるのである。その時点においては、すでに源氏の養女である「秋好中宮」という女性がいるのであって、「前斎宮」という条件は、物語において、かつての名称としての意味以外、もはや何の役割も果たさなくなるのである。つまり「斎宮」としての前坊の姫君は、六条御息所の死とともに姿を消してしまふのである。

しかしこう考えてきた時に、何故、秋好中宮は斎宮でなければならなかったのか。実際に斎宮であつた重明親王の女、村上天皇女御微子女王がモデルであるとか、その他、史実をもとにしたの準拠論も考えられているが、そのことについては、次の「斎宮の女御と母六条御息所の造型」で考察する。ここでは、紫上との関連を重視して考えてみることにしたい。

紫上の六条院においての住まいは東南の春の御殿、秋好中宮は西南の秋の御殿である。紫上は、北山の桜咲く中で見いだされ、「紫のゆかり」「春の御方」として、その美しさも桜に喩えられる。一方、前斎宮女御は住まう殿舎から梅壺女御とも呼ばれ、そして後に秋好中宮と呼ばれる。秋好中宮は光源氏の秘密の妻子である冷泉帝の后になることで養父である源氏の地位を安定させ、繁栄させる。紫上は光源氏のたった一人の娘「明石姫君」の養母となって姫君を育て、入内させ、光源氏の将来にわたる繁栄を築いていく。しかし、二人ともに実子を持たない。秋好中宮は薫大將の後見をし、紫上は孫の匂宮をかわいがる。紫上と秋好中宮は、このように一見何の關係もなさそうでないが、ことごとく対比される關係で物語られていく。

そしてさらに、どうして前斎宮が「秋好」でなければならな

かったかを考えた時、紫上との春秋の争い、「薄雲」の巻に描かれる、母六条御息所の死が秋であり、それに関わらせて、「秋を好む」と言つたことに拠るとも、秋の御殿に住んだことで秋好中宮と呼ばれるとも、物語には書かれる。しかし歴史的側面から「秋」という季節をみると、醍醐天皇の時代から一条天皇の時代まで約百年の間、斎宮になつたのは十二人であるが、その斎宮の群行は、『延喜式』にも「九月上旬、卜定吉日。臨河祓禊。参入於伊勢齋宮」と載るように、九月がほとんどで、晩秋に鈴鹿の山を越えていくのである。つまり前斎宮が秋好中宮と名付けられたのも、斎宮の群行によるイメージが秋に結びつくところからきているともいえる。

このようにみてくると、これらの『源氏物語』に登場する斎宮、斎院は、「斎宮・斎院」として、物語の表面で表だって活躍するわけではない。しかしこの斎王方が『源氏物語』全編に投げかけている影響力がきわめて強いことは無視できないのである。ここまで述べてきたように、一見目立たない存在でありながら、斎王方は物語の重要な一翼をになう役割を果しているといえるのである。

三 斎宮の女御と母六条御息所の造型

言うまでもなく、『源氏物語』のさまざまな記述の特色は、歴史的事実や、古歌・催馬楽・長恨歌、または先行の物語などを踏まえ、引歌や引詩を用いることで、描写の奥行きを生み出し、物語の世界をふくらませていくところにある。あるいはま

た、例えば「帚木」の巻で、登場人物の、馬頭の言葉として、漢文の素養をひけらかして手紙を書く上流の女性への批判を述べさせるが、そこには実際の一条天皇の皇后定子の母高内侍を意識しての批判であったり、また続けて、清少納言批判をやっているのけりたりもする。それらはあくまでも物語設定の中で、登場人物に自然に語らせているものであるが、読んでいる読者は「ああ、あのことね」とわかるようにしくまれた二重三重の構造であって、その重層構造が、『源氏物語』を、ストーリーのおもしろさだけでなく、『源氏物語』世界の複雑な広がり的魅力を創り出していくといえよう。

『源氏物語』における「齋宮・齋院」を考えてみた時、朝顔の齋院や六条御息所と秋好中宮母子の設定は何を準拠にしているのか。作者が人物創造の構想を練った時、一つの事件、一つの事柄、一人の人物だけをモデルにしたとはとても考えられず、作者は様々な史実や伝承を踏まえて、その上に作者自身の想いを加えて物語り世界を構築していったと考えられる。では『源氏物語』に登場する「齋宮・齋院」はどのような史実・伝承・事柄を踏まえて人物造型がなされていたのだろうか。

そこで『源氏物語』ができた一条天皇の時代より前で、あまりに古い時代ではなく、認識の共通の土壌をもち『源氏物語』を読む人々がこれはあ的事だと納得し、史実と想像が置きかえられるぐらいの時代。せいぜい百年ぐらい前までの、醍醐天皇の時代までをさかのぼり、退下後、后になった齋王、親子で伊勢に下った齋宮、前坊の姫である齋王、廃太子を親、または近親者に持つ齋王を史実から追って考えていきたい。

次頁の第二図は、醍醐天皇から一条天皇までの歴代齋宮齋院一覧表である。

この第二図の歴代齋宮齋院一覧表を理解し、補うために、いくつかの要点を挙げると、

① この表の範囲では、齋院はすべて内親王（皇女）であるが、齋宮は十二人中五人、約半分は女王である。

② 齋宮は一代に一人、必ず卜定されるが、齋院は何代にも渡って一人の齋院が任を行う場合があり、それが許される。

③ 規子内親王は父親は村上天皇、母親は微子女王であり、その微子女王は朱雀帝の代の齋宮で、任期果てて後入内して規子内親王を生んでおり、母子二代にわたる齋王である。またこの表には載らないが、元正天皇の代の井上内親王と酒人内親王、酒人内親王と朝原内親王が母子であり、母子二代に渡る齋宮である。しかし、母親が娘の齋宮について伊勢にくだったのは微子女王だけである。

④ 齋宮の任終えて後に入内したのは、この表だけで言えば、微子女王が村上天皇の女御になり、また尊子内親王が齋院の任果てて後に円融天皇の女御になっている。しかし、それ以前の齋王をみると、三人の齋宮と一人の齋院が任果てて後妃となっている。

一人は光仁天皇の皇后になった井上内親王であり、この人は後に廃后となる。もう二人は井上内親王の娘である酒人内親王が桓武天皇の妃となり、その酒人内親王の娘の朝原内親王が平城天皇の妃になっている。また光孝天皇の娘で齋院であった穆子内親王が醍醐天皇の妃になっており、齋

⑤ 王の任果てて後の入内はそれほど珍しいことではない（第三図・第四図を参照）。
雅子内親王は「六條斎宮」と号し、『大和物語』九三段に登場する斎宮である（日本古典文学全集頭註）。中納言（藤原敦忠）に思われて「今日明日あひなむとしけるほどに、

⑥ 伊勢の齋宮の御占にあひたまひにけり。」と、愛が引き裂かれての赴任である。
史実の中で、井上内親王とその息子他戸親王の廃后、廃太子の事件。また承和の変での恒貞親王の廃太子、皇太子保明親王の病死とそれにかかわる世継ぎをめぐる問題。

（第二図）

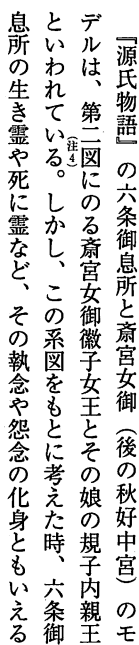
天皇		斎宮		両親		斎院		両親	
醍醐	柔子内親王	雅子内親王 注A	宇多・藤原胤子	醍醐・源周子	醍醐・源和子	重明親王・藤原寛子	醍醐・藤原淑姬	重明親王・藤原寛子	醍醐・源和子
朱雀	齊子内親王	徽子女王 注A	醍醐・源和子	重明親王・藤原寛子	醍醐・源和子	重明親王・藤原寛子	醍醐・源和子	重明親王・藤原寛子	醍醐・源和子
村上	悦子女王	英子内親王	醍醐・藤原淑姬	重明親王・藤原寛子	醍醐・源和子	重明親王・藤原寛子	醍醐・源和子	重明親王・藤原寛子	醍醐・源和子
冷泉	輔子内親王	隆子女王	村上・莊子女王	村上・藤原安子	村上・藤原安子	村上・藤原安子	村上・藤原安子	村上・藤原安子	村上・藤原安子
円融	隆子女王	規子内親王 注B	章明親王・藤原敦敏女	章明親王・藤原敦敏女	章明親王・藤原敦敏女	章明親王・藤原敦敏女	章明親王・藤原敦敏女	章明親王・藤原敦敏女	章明親王・藤原敦敏女
花山	濟子女王	恭子女王	為平親王・源高明女	選子内親王	選子内親王	選子内親王	選子内親王	選子内親王	選子内親王
一条	恭子女王	為平親王・源高明女	選子内親王	選子内親王	選子内親王	選子内親王	選子内親王	選子内親王	選子内親王

注A 群書類従第四輯「斎宮記」に、六條斎宮と号すとのる。
注B 群書類従第四輯「斎宮記」には、ことさら無品親子内親王とのる。ここでは「無品」をはずして表記した。

といった六つの点が挙げられる。それらの事柄が、『源氏物語』とどのように関わり合い、『源氏物語』の素材に組み込まれていったのか、という点について、考えていきたい。

まず、次の第三圖を踏まえた上で、六条御息所について考えたい。

(第三回)



一人の女の姿は、史実の世界においては、斎宮女御、微子女王よりも時代は遡るが、斎宮であり、任果てて後皇后となり、またその時代は遡るが、王権の被害者とも言うべき井上内親王が色濃く姿を現す。六条御息所の場合は、前坊は夫であり、またその

夫の前坊が、廢太子であるのか、病死であるのかについては、明記されていない。また、六条御息所その人自身は斎王ではない。斎宮であつた井上内親王の場合は、夫ではなく、息子他戸親王が廢太子となっている。そこが異なるが、娘酒人内親王の斎宮退下後の入内という事実。そして、井上内親王は前述のように、皇后を廢され幽閉され、恨みを内在させて死んでいく。

そこが、『源氏物語』の六条御息所と差異はあるものの、六条御息所の情念の深さを想起させる。たしかに『源氏物語』の六条御息所の話と井上内親王の話は、厳密に言えば相違点がいくつもあるが、井上内親王の人生の暗さ、闇の部分と、六条御息所の人生の重さとの間に底通するものがあることは排除できない。

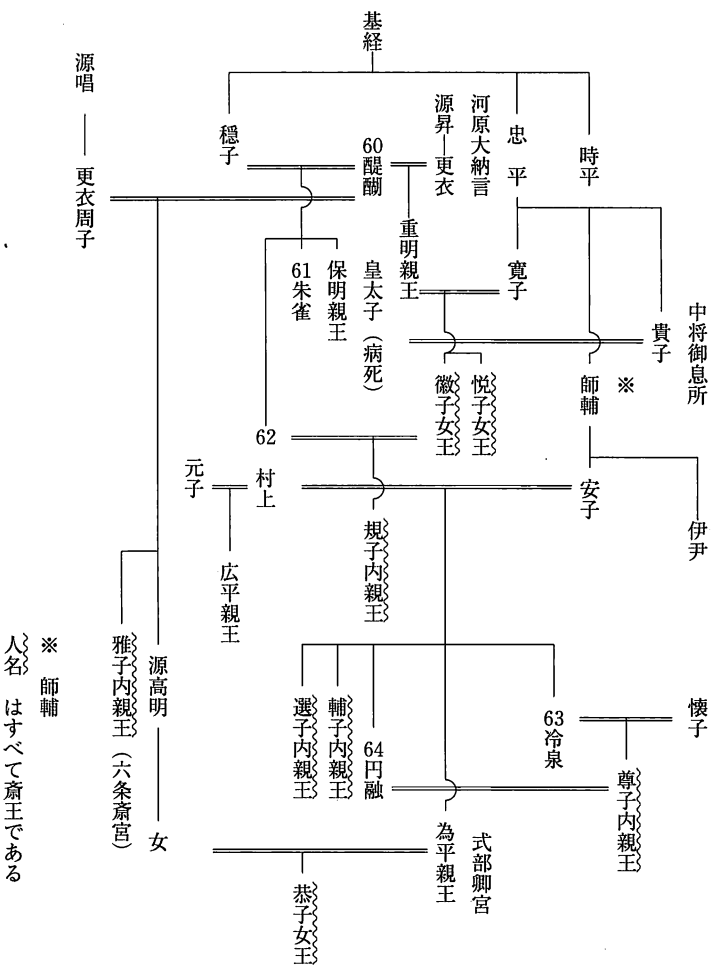
もう一件、早良親王が藤原種継暗殺事件にかかわつたとして廢太子にされ、淡路に流される途中死去したという事件が同じ時代に起こっている。しかし、早良親王を死に追いやつた張本人である桓武天皇は、早良親王の怨霊を恐れ、後に崇道天皇の尊号を贈る。このような熾烈な王権闘争と廢太子の事件が、桓武天皇という一人の天皇の代に二度も起きるのである。そしてその怨霊のたたりを恐れて、後に尊号を贈ることで、その祟りからまぬがれようとしている。井上内親王の場合も、皇后位を復せられるが、怨霊と切り離せない。そこが六条御息所と似るのか、この系図第三図に内在する事実は、『源氏物語』を構成する一つの物語の素材となっている。次の第四図は斎宮・斎院の両方を含めた「斎王とその周辺」の關係系図である。

この第四図からいえることは、史実が『源氏物語』の中に様々

に反映されているということである。その一つは皇統の伝わり方が、それはこの時代に限つたことではないが、兄から弟に伝わっている事実である。『源氏物語』においても、桐壺帝の御代の皇太子は、始め桐壺帝の弟で六条御息所の夫である前坊であり、本来ならこの前坊が次の天皇になるはずであつた。しかし、既述のように物語の中からは消え、光源氏の兄の朱雀帝が即位し、次に真実は光源氏の子であるが、表面上は朱雀帝や光源氏の弟である冷泉帝が即位をする。史実では、醍醐天皇の皇太子保明親王が病死し、皇太弟の朱雀天皇が即位する。そして次は朱雀帝の弟の村上天帝が即位している。そして朱雀帝には男皇子はおらず皇統は村上天皇の流れに移る。『源氏物語』においても、前坊が廢されたか、病死したのか、物語上では「前坊」という名称だけが残し、また、朱雀帝の後に即位した冷泉帝にも、在位中には男皇子はおらず、朱雀帝の皇統に定まっていくなりの上ではよく似ている。

六条御息所のモデルともされる斎宮女御徽子女王の父親は、醍醐天皇の皇子であり詩文をよくし、音楽にも秀でたという重明親王である。母は藤原忠平の娘寛子である。

しかし病死した前坊保明親王の室が中将御息所とよばれ、後に重明親王の室となつたと伝えられていることにも注目したい。斎宮女御徽子女王の母がどちらであるかはここではおくとし、その娘が斎宮の任果てて後入内し、生まれた子が斎宮となり、その斎宮とともに伊勢まで行くのである。このあたりも『源氏物語』と一部重なる。全く重なり合うのではなく、微妙にずれながらも重なるのである。『源氏物語』では、我が子斎宮と



(第四図)

もに行く人が六条御息所であり、その斎宮が後に入内して斎宮女御と呼ばれ、後に秋好中宮になっていく。また徽子女王の父

親重明親王の母は更衣であるがその父親は河原大納言と呼ばれた源昇であり、河原院の持ち主である源融の息子である。また

斎宮の任果てて後に師輔の室になった雅子内親王は六条斎宮と号せられた人である。兄の源高明は安和の変で太宰府に左遷され、高明の娘を妻にしていた為平親王は王位継承からはずされる。この辺りになると「橋姫」に描かれる源氏の異母弟八の宮を、弘徽殿の太后が東宮、後の冷泉帝を廃して世継ぎの君にしようとしたことなどが、思い合わされてくる。

一条天皇が紫式部を評して「この人は日本紀（六国史）をこそ読みたるべけれ」と言ったという話はあまりに有名であるが、確かにその通りで、紫式部が見聞したり、知識として知っていた史実や事柄が実に上手に人々の記憶を呼び覚まし、刺激する形で、『源氏物語』の話の中に組み込まれている。そうした創作方法を探ることが、享受者の一層の興味、関心をさらにかきたて、物語世界の読解へと向かわせることになったと考えられる。六条御息所の人生も性格付けも、そのような意図のもとに考え出されていったものであるといえる。この方法がより高度の形で発揮されるために、歴史上のさまざまな人物の人生が、紫式部の眼前にあったといえるのではなからうか。そうした歴史上の人物の存在そのものが、触発しあい、虚構の中に再生してきたのである。そう考えたとき、六条御息所が創り出される過程には、特定のモデルは一人ではなく、歴史上に生きたたくさん的人物がいたのであるといえる。同様に秋好中宮も斎宮として登場した時と、退下して入内してからの生身の人間としての性格はあまりに違うが、それは、本稿においてみた通りである。また「秋好中宮という人物が一人のモデルによって形成されたものではなくて、様々の史実をふまえながら多くの人物

の映像が重ね合わされて創造されている」という論もあるように、やはり多くの人物の人生が複合されたために、ある意味では秋好中宮という一人の人物が、全く違う人物のように造型されたのであろう。『源氏物語』における斎王は、「斎宮、斎院」という、職掌としての、物語上での位置づけに重きは置かれていないが、まさに政治に翻弄されて生きた女性として、実に見事に描かれて、物語の中で重要な役割を担いつつ『源氏物語』の中で息づいている。

注1 引用の『源氏物語』本文は新編日本古典文学全集・小学館による。

注2 斎宮卜定のさまざまないきさつ、政治的な背景については別稿において詳細に論じていくつもりであるが、酒人内親王、朝原内親王、恬子内親王の例のように、廃太子であった人の縁者であった場合が多いことだけをここでは指摘しておく。

注3 『本朝皇胤紹運録』には酒人内親王は桓武天皇と同母で高野新笠とのり、佐藤虎雄「桓武朝の皇親をめぐりて」『桓武朝の諸問題』（古代学協会編）や目加田さくを著『物語作家圈の研究』（武蔵野書院刊）などではその説をとっている。山中智恵子著『斎宮志』では、井上内親王と酒人内親王は母子と見る。その説を採る。

注4 『源氏物語』の人物像を考えていくと『河海抄』を代表とする準拠論や近代のモデル論の成果に行き当たる。田中隆昭著『源氏物語 歴史と虚構』（平成五年・勉誠社）では『源氏物語』の斎宮関係の記述が親子内親王の場合から単に伊勢下向の

時の母親同伴のヒントを得たのみではなく、卜定から群行に至る叙述の資料を得ていると考えられる」として、詳細な考察をされている。また、嘉成悠紀氏は「六条御息所伊勢下向の意味」(『日本文学誌要』第52号)で徽子女王をモデルと考え、「御息所に斎宮の母という役割を付与し、娘と共に伊勢に下向した徽子女王の史実を援用する必要があったのではないかと論じている。所京子著『斎宮の歴史と文学』(図書刊行会)で所氏は、「事実、この規子内親王の伊勢下向に関する資料は『源氏物語』にそのまま取り入れられている」と述べて詳細に論じている。

注 5

山中智恵子著『斎宮女御徽子女王』において、氏は「日本紀略」応和二年(九六二)に、『内侍従二位藤原朝臣貴子薨年五十九』とあって、天慶八年(九四五)『中務卿重明親王室家藤原氏(貞信公二女)卒 伊勢斎王(徽子)母也。仍斎王退出』と矛盾し同一人ではあり得ない。」とする。『大鏡』やその裏書きは、忠平の娘は保明親王の室になって中将御息所とよばれる貴子一人だけであり、保明親王没後に重明親王の室になったとのる。また『尊卑分脈』は貴子ともう一人「女子」とのる。ここでは「女子」がもうひとりいたと見て、寛子と見ておきたい。

注 6

注 4 の田中隆昭著『源氏物語 歴史と虚構』

この論文は、修士論文「斎王と文学」の一部を加筆修正したものである。

(はら まきこ・博士後期課程一年)